様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：３７１０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０１１３

研究課題名（和文）北部九州地方における儒学思想の基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental Research of Confucianism thought in the northern Kyushu region

研究代表者
吉田　洋一（YOSHIDA, youichi）

久留米大学・文学部・准教授

研究者番号：９０４４１７１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、江戸時代中期に北部九州地方で活躍した儒医学者・亀井南冥(1743-1814)を中心に、「筑前亀井家」の全容解明への基礎的作業を試みた。2011・2012年度は、主に九州管内に所蔵されている亀井家とその周辺の史料調査を行った。2013・2014年度は、その調査結果に基づく社会への還元（口頭発表、シンポジウム、論文等）を実施し、一定の成果を得たが、九州以外の他地域に関する調査には課題を残した。

研究成果の概要（英文）：In this study, focusing on the mid-Edo period in the northern part Confucian scholar-medical scientists-Kamei Nanmeiwas active in the Kyushu region (1743-1814), it was attempted to basic work on the whole picture elucidation of "Chikuzen Kamei family".
2011 - 2012 fiscal year, was carried out mainly Kamei family are holdings in Kyushu canal and historical survey of its surroundings.2013 - 2014 fiscal year, the survey reduction to the results based on society was carried out (oral presentations, symposia, paper, etc.), and got a certain degree of success, leaving a challenge to research on other regions outside of Kyushu.

研究分野：日本思想史

キーワード：亀井南冥　筑前亀井家　日田廣瀬家　肥前・肥後　中津村上家　藤陵家

１．研究開始当初の背景

亀井南冥（1743～1814）は、江戸時代の北部九州を代表する儒学者であり医者である。寛保三年（1743）父・聴因（古医方派の医者）、母・徳の長子として、筑前国早良郡姪浜（現福岡市西区姪浜）にて出生。その後、肥前蓮池の儒僧・大潮（1678～1768）、大坂の儒医学者・永冨独嘯庵（1732～66）らに師事し、帰国後父と共に自宅（唐人町・現福岡市中央区）敷地内にて開業、同時に儒学講義所（蜚英館、のち南冥堂）を開設。この「教育者」としての活動や朝鮮通信使応接（宝暦十三年・1763）の際の漢詩文の才能などにより、安永七年（1778）、「儒医兼帯」として福岡藩（七代藩主・黒田治之）に召抱えられ、同藩藩校（東学・修猷館及び西学・甘棠館）設立に尽力。寛政四年（1792）甘棠館祭主の地位を追われ、文化十一年（1814）に生涯を閉じた。

南冥及びその子孫や門人（廣瀬淡窓ら）に関する先行研究は、その儒学的側面が大部分を占める[1]。これは同家に「家譜」や「門人帳」などといった家伝の資料が存在しないため、著作物中心の研究しか行われていないのが現状である。未確認の資料をできる限り発掘し、近世全般における北部九州地方の知識層の諸相を概観できるようにすることが研究当初の背景である。

２．研究の目的

本研究を遂行する最も重要な意義は、北部九州の儒学及び医学思想伝播過程の事例として、亀井南冥関連資料の調査に基づき、「亀井家資料（仮）」の全容解明を試みることである。北部九州地方は、主に長崎を中心として江戸時代を通じて西洋文化の発信地であった。当地域の自然科学の受容についての詳細な検証を行なうことは、その後の幕末・維新期との連続性を解明する上で必要不可欠である。

筑前地域だけでなく、亀井家との交友関係が密である近隣地域（筑後、豊前、肥前、肥後など）も調査対象に加える必要があると思われる。

３．研究の方法

研究の具体的な方法は以下の通りである。

① 筑前亀井家に関連する史料の悉皆調査。
② 肥前（主に佐賀）地域に残存する亀井家関連の史料収集及び調査。
③ 肥後（主に熊本）地域に残存する亀井家関連の史料収集及び調査。

４．研究成果

（1）「水火物語之事」について

南冥作とされ現在まで未見であった写本「水火物語之事」の解説と、南冥が福岡藩政にどのようにして関わりをもとうとしていたのかを検討する。

香川大学附属図書館神原文庫所蔵の書冊（資料番号四九〇・四）は、表題に「亀井南冥先生筆蹟」とあり、本文中にも「亀井道哉百拝」とあることから、写本ではあるが南冥作であることはほぼ間違いなかろう。以下、これが記された経緯と内容について概略する。

南冥は市井の一学者から福岡藩儒に抜擢される以前、現福岡市西区唐人町にて父聴因と共に診療所を開業していたが、当時の学者・知識人がいわゆる「漢学・経学」だけでなく医学をも研鑽することは、荻生徂徠（1666～1728）や貝原益軒（1630～1814）をはじめ珍しいことではなく、生計を立てるためや儒学の本質を把握するための素養として医学を併用して学修した。南冥も同様にして宝暦十二（1762）年に医師・永冨獨嘯庵に指南していたことは前述した。南冥は藩への出仕後、藩政に対する意見書や政策論の類を精力的に執筆しているが[2]、同時に医学に関しても、当時の藩主黒田治之（七代）の病症の記録や、『病因備考』（天明二年・写本）という各々の病症の処方箋を作成するなど活動を怠らなかった。これら医学書の一環としてこの「水火物語事」が執筆された可能性が高い。

書冊の冒頭には、福岡藩侍医である鷹取家に充てたと考えられる記述がなされ、同家の不祥事[3]を未然に防止するための対策がつづられている。具体的な実践例として、「医師身退願」の草案を提出することによって南冥はまず藩内部の医者の改変から着手しようとした。医者の選抜方法として、一人の医者が藩家老と五人の医者の前で講義をし、過半数の承認を得れば家督を相続することができる、もし得られなかった場合は一～三年修養したのち再び講義を行う、三回行っても認められないときは知行を召し上げかそれに準じた降格などの罰を受ける、跡継ぎが幼少の場合は二十五歳を待って行う、と記している。

この「医師身退願」に関わる一連の文章による影響は、管見に及ぶ限りにおいては福岡藩史上見いだし得ない。本史料は、南冥自身と藩政府との関係などを今後より深化させて理解するためにはさらなる検討が必要である。

（2）藤陵家資料の発見

藤陵家は嘉麻郡臼井村西郷（福岡県嘉麻市西郷）で医業を営んでいた家である。同家家譜によると、初代玄堅（1741～1840）は明和元年（1764）医者を生業とするにあたり、藤

[1] 伝記として代表的なものには、高野江鼎湖『儒侠 亀井南冥』共文社・1913 年、荒木見悟氏・叢書・日本の思想家『亀井南冥・亀井昭陽』明徳出版社・1988 年、などがある。

[2] 『半夜話』（1778 年）、『肥後物語』（1781 年）は『亀井南冥昭陽全集第 1 巻』葦書房、1979 年所収。

[3] 詳細は調査中。

嶋の姓から藤陵に改姓したという。二代目一圭（1789～1878）は秋月藩に召抱えられ、また、京都御室御所にも医者として出仕した。三代目鼎（1818～74）、四代目鳳山（1848～95）も医者で、やはり秋月藩に召抱えられていた。五代目章成（1876～？[4]）も医者であり、長崎医学校（現長崎大学医学部）を卒業後、郷里を離れることになった。

同家調査の経緯は、所蔵資料のなかの「五亀画賛」と呼称されている掛幅の問い合わせが（財）亀陽文庫・能古博物館にもたらされたことによる。「五亀画賛」とは、亀井南冥をはじめ、息子昭陽（1773～1836）、大壮（1774～1825）、大年（1777～1812）、南冥弟・曇榮（1750～1816）の賛が記された五匹の亀の図である[5]。

同家では、「五亀画賛」の他、初代玄堅夫妻の肖像（秋圃[6]筆・亀井鋏（暘洲）顕と記された画賛）などを保管してきた、という。

五亀画賛（藤陵家所蔵）

六代目になる依頼者の父巌達はカメラレンズの設計者となり医業は継がず、七代目が嫁いだため藤陵家は途絶えることになった。

同家所蔵資料は、前述の家系図の他、証文類・写真類などを含めると 1000 点を超えるもので、同家と亀井家との関係や、江戸時代の地域医療の現状など、亀井家周辺の研究に裨益する可能性は大きいと思われる。

藤陵家資料に関する初見は 2014 年 8 月であり、継続的な調査研究が必要不可欠である。また研究期間の業績に関しても散発的に行われ、個々の研究に関する包括的な検証に至ってない。各研究成果を統合し、より実証的に公表することが今後の課題である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１０件）

① 吉田　洋一、村上玄秀「論語聞書」について、中津市歴史民俗資料館分館医学史料叢書、査読無、vol.12、2013、1-31

② 大島　明秀・成富なつみ、幕末の熊本藩儒辛島蘭軒について、国文研究（熊本県立大学日本語日本文学会）、査読無、58 巻、2013、33-46

③ 大島　明秀、志筑忠雄「阿羅祭亜来歴」の訳出とその書誌、雅俗、査読無、12 巻、2013、33-47

④ 島　善高、木下韡村日記（三）、早稲田社会科学総合研究、査読無、第 14 巻第 1 号、2013、1-24

⑤ 島　善高、木下韡村日記（四）、早稲田社会科学総合研究、査読無、第 14 巻第 2 号、2013、1-24

⑥ 吉田　洋一、廣瀬家関連書籍の出版事情―廣瀬貞治の功績を中心に―、南榮科学技術大學 2014 異文化交流国際學術検討會論文集、査読有、2014、37-47

⑦ 吉田　洋一、村上家の人物交流―所蔵掛幅を素材として―、中津市歴史民俗資料館分館医学史料叢書、査読無、vol.13、2014、38-57

⑧ 吉田　洋一、「福岡藩御番医亀鑑」の翻刻、久留米大学文学部国際文化学科紀要、査読無、第 31 巻、2014、53-69

⑨ 吉田　洋一、村上春海の紀行文―「諸雑用記」を中心に―、中津市歴史民俗資料館分館医学史料叢書、査読無、vol.14、2015、39-81

⑩ 吉田　洋一、春庵文稿（和文篇）、久留米大学文学部国際文化学科紀要、査読無、第 32 巻、2015、印刷中

〔学会発表〕（計２件）

① 吉田　洋一、北部九州の儒学、異文化交流国際學術検討會、2013 年 2 月 22 日、南榮技術學院（台湾・台南市）

② 吉田　洋一、廣瀬家関連書籍の出版事情―廣瀬貞治の功績を中心に―、南榮科学技術大學 2014 異文化交流国際學術検討會、2014 年 3 月 14 日、南榮科技大學（台湾・台南市）雑誌論文②と同内容

〔その他〕

① シンポジウム（計１件）
眞木　大樹・眞木　啓樹・吉田　洋一・坂口　秀俊・島　善高・神渡　良平・志

---

[4] 没年に関しては調査中。

[5] 現在数種類確認されており、夭折する大年に替わり孫の暘洲（1808～が記したものもある。

[6] 斎藤秋圃のことか、未詳。

賀　建一郎・大園　隆二郎、眞木和泉の思想をたずねて―幕末から明治初期、欧米からの外圧を前に日本はどう生きたか―、「眞木和泉守の修業過程」(吉田)、2013 年 7 月 21 日、久留米大学

② 招待講演（計１件）
吉田　洋一、北部九州の醫學と久留米大学、異文化交流国際學術検討會、2015 年 3 月 4 日、南榮科技大學（台湾・台南市）

６．研究組織

(1)研究代表者
吉田　洋一（YOSHIDA, Youichi）
久留米大学・文学部国際文化学科・准教授
研究者番号：９０４４１７１６

(2)研究分担者
島　善高（SHIMA, Yoshitaka）
早稲田大学・社会科学総合学術院・教授
研究者番号：６０１８７４２４

大島　明秀（OOSHIMA, Akihide）
熊本県立大学・文学部・准教授
研究者番号：５０５０８７８６